氏　　名	ヤ　シロ　ミチコ **八　代　美智子**
学位の種類	博士（工学）
学位記番号	博第905号
学位授与の日付	平成25年9月4日
学位授与の条件	学位規則第4条第1項該当　課程博士
学位論文題目	ヨーゼフ・フランクの住宅作品の空間デザインに関する研究 (A Study on the Spatial Design of Josef Frank's Houses)
論文審査委員	主査　教授　河田克博 教授　堀越哲美 教授　麓和善

論文内容の要旨

オーストリア出身の建築家ヨーゼフ・フランク Josef Frank(1885～1967)は、オットー・ワグナーやヨーゼフ・ホフマン、アドルフ・ロースなどのウィーンの先輩建築家たちが開拓した近代デザインの継承者とされる。ヴァイゼンホーフ・ジードルンク住宅展（ドイツ、1927)には、オーストリアから、ただ一人出品した。しかし、その内部空間のデザインに、バウハウスに代表される近代デザインへ若干批判的姿勢を示している。また、CIAM（近代建築国際会議、1928）には、第1回から参加しているが、のちに、こうした近代デザインの潮流から大幅に逸脱するような、フランク独自のデザイン観、建築観を確立するに至るとされる。建築作品とともに、建築に関する理論的言説も遺した建築家でもある。

しかし、当時のフランクの盛んな活動にもかかわらず、現在、日本では勿論、オーストリア以外の国々において、フランクの知名度は低いと思われ、その建築作品や家具・テキスタイルのデザインについての研究は数少ない。

そこで本研究は、フランクの空間デザインを研究する上で重要と考えられる1戸建住宅の、その年代を代表する作品をウィーンとスウェーデンのファルステルボーとに国別に取り上げ分析し、フランクの住宅作品の空間的特質の一端を明らかにすることを目的とする。

本論文は次の5章から成る。

第１章「序論」では、本研究の対象であるフランクの略歴を年表とともに紹介し、主要建築作品のリストを掲載した。次に、研究対象として収集した先学の論文と書籍のリストを掲載した。そして、本研究の目的と意義について述べ、研究の位置づけを論じ、本研究の重要性を明確化したうえで、本研究の構成について記述した。

第２章「ウィーンにおける前期住宅作品から後期住宅作品への展開」では、フランクの初期の代表的作品といえる「ショル邸（Sholl House, 1913～1914)」・中期の代表作品といえる「ベーア邸（Beer House, 1929)」・そして後期の代表作品といえる「第２ブンツル邸(Second Bunzl House, 1935)」を取り上げ、動線に着目して、平面形態からはじめ、全体形態と空間全体を分析し、内部空間の統合手法を探り、空間的特質について考察した。その結果、ショル邸は概ね左右対称を保持した１ボリュームの全体形態であり、内部空間は視覚的に水平に広がるホールがメイン階段と連携した高さの異なる床を空間的に統合していた。また、ベーア邸では、１ボリュームの一部を崩した全体形態であり、吹き抜けをともなう中央ホールとそこに配置された変化に富んだメイン階段が連携して、高さの異なる床を空間的に統合していた。そして第２ブンツル邸では、異なる４つの直方体ブロックを分散的に配置した全体形態を持ち、玄関ホールとつながるオープンな階段が高さの異なる床を空間的に統合していたことが明らかとなった。

第３章「スウェーデンにおける住宅作品について」では、ファルステルボーにおける６建築作品の概要を一覧表にしたうえで分析を行った。すなわち、６軒の夏の家のヴィラ・クラーソン(Villa Claeson, 1924～1927)、ヴィラ・カールステン(Villa Carlsten, 1927)、ヴィラ・セット(Villa Seth, 1934)、ヴィラ・ローフトマン(Villa Laftman, 1934)、アトリエ・アンデシュ エステリング(Atelier Anders Östering, 1934)、ヴィラ・ウェッチェ(Villa Wehtje, 1936)の全体形態と各内部空間についての分析を行い、フランク特有の動線の手法による、変化ある空間の展開を確認した。そして、６軒のヴィラの動線について、フランクの「論文」の概念にもとづき、さらに分析を行い、内部空間の統括手法を見出した。

第４章「ウィーンとスウェーデンにおける住宅作品の比較」においては、ウィーンの第２ブンツル邸と建築年代の近いファルステルボーのヴィラ・ウェッチェの内部空間を比較した。その結果、２住宅の内部空間は、同様に機能別ブロックに分割され、「ホールと階段」により空間的に統合されており、また全体形態は、初期の概ね左右対称を保持した１ボリュームから、後期の分散的形態へ変遷していることを確認した。しかし、ヴィラ・ウェッチェは曲線的平面形態であり、第２ブンツル邸は、直線的平面形態であった。

第５章「結論」では、第２章から第４章の分析結果を受けて総括し、ヨーゼフ・フランクの住宅作品の持つ空間デザインの、他一般の近代建築家とは一線を画する独自の特質を導き出し、最後に、本研究の問題点と今後の課題についての展望を述べた。

論文審査結果の要旨

オーストリア出身の建築家ヨーゼフ・フランク Josef Frank(1885～1967)は、オットー・ワグナーやヨーゼフ・ホフマン、アドルフ・ロースなどのウィーンの先輩建築家たちが開拓した近代デザインの継承者とされる。ヴァイゼンホーフ・ジードルンク住宅展（ドイツ、1927)には、オーストリアから、ただ一人出品した。しかし、その内部空間のデザインに、バウハウスに代表される近代デザインへ若干の批判的姿勢を示している。また、CIAM（近代建築国際会議、1928）には、第１回から参加しているが、のちに、こうした近代デザインの潮流から大幅に逸脱するような、フランク独自のデザイン観、建築観を確立するに至るとされる。またフランクは、建築作品とともに、建築に関する理論的言説も遺した建築家でもある。

しかし、当時のフランクの盛んな活動にもかかわらず、現在、日本では勿論、オーストリア以外の国々において、フランクの知名度は低いと思われ、その建築作品や家具・テキスタイルのデザインについての研究は数少ない。

以上に基づき、本研究は、フランクの空間デザインを研究する上で重要と考えられる１戸建住宅の、その年代を代表する作品をウィーンとスウェーデンのファルステルボーとに国別に取り上げ分析し、フランクの住宅作品の空間的特質の一端を明らかにすることを目的としている。

本論文は次の５章からなっている。

第１章「序論」では、本研究の対象であるフランクの略歴を年表とともに紹介し、主要建築作品のリストを掲載している。次に、研究対象として収集した先学の論文と書籍のリストを掲載し、さらに、本研究の目的と意義について述べ、研究の位置づけを論じ、本研究の重要性を明確化したうえで、本研究の構成について記述している。

第２章「ウィーンにおける前期住宅作品から後期住宅作品への展開」では、フランクの初期の代表的作品といえる「ショル邸（Sholl House, 1913～1914)」・中期の代表作品といえる「ベーア邸（Beer House, 1929)」・そして後期の代表作品といえる「第２ブンツル邸(Second Bunzl House, 1935)」を取り上げ、動線に着目して、平面形態からはじめ、全体形態と空間全体を分析し、内部空間の統合手法を探り、空間的特質について考察している。その結果、ショル邸は概ね左右対称を保持した１ボリュームの全体形態であり、内部空間は視覚的に水平に広がるホールがメイン階段と連携した高さの異なる床を空間的に統合していること。また、ベーア邸では、１ボリュームの一部を崩した全体形態であり、吹き抜けをともなう中央ホールとそこに配置された変化に富んだメイン階段が連携して、高さの異なる床を空間的に統合していること。そして第２ブンツル邸では、異なる４つの直方体ブロックを分散的に配置した全体形態を持ち、玄関ホールとつながるオープンな階段が高さの異なる床を空間的に統合していたことを明らかにしている。

第３章「スウェーデンにおける住宅作品について」では、ファルステルボーにおける６建築作品の概要を一覧表にしたうえで分析を行っている。すなわち、６軒の夏の家のヴィラ・クラーソン(Villa Claeson, 1924～1927)、ヴィラ・カールステン(Villa Carlsten, 1927)、ヴィラ・セット(Villa Seth, 1934)、ヴィラ・ローフトマン(Villa Laftman, 1934)、アトリエ・アンデシュ エステリング(Atelier Anders Östering, 1934)、ヴィラ・ウェッチェ(Villa Wehtje, 1936)の全体形態と各内部空間についての分析を行い、フランク特有の動線の手法による、変化ある空間の展開を確認している。そして、６軒のヴィラの動線について、フランクの「論文」の概念にもとづき、さらに分析を行い、内部空間の統括手法を見出している。

第４章「ウィーンとスウェーデンにおける住宅作品の比較」においては、ウィーンの第２ブンツル邸と建築年代の近いファルステルボーのヴィラ・ウェッチェの内部空間を比較している。その結果、２住宅の内部空間は、同様に機能別ブロックに分割され、「ホールと階段」により空間的に統合されており、また全体形態は、初期の概ね左右対称を保持した１ボリュームから、後期の分散的形態へ変遷していることを確認している。しかし、ヴィラ・ウェッチェは曲線的平面形態であり、第２ブンツル邸は、直線的平面形態であったことを指摘している。

第５章「結論」では、第２章から第４章の分析結果を受けて総括し、ヨーゼフ・フランクの住宅作品の持つ空間デザインの、他一般の近代建築家とは一線を画する独自の特質を導き出し、最後に、本研究の問題点と今後の課題についての展望を述べている。

以上より、本論文は、近代建築史のなかで、とくにヨーゼフ・フランクの住宅作品の変遷過程に焦点を当て、今日まで不明瞭であった空間デザインの特質を論じて新たな知見を見出したもので、博士論文として工学的・建築学的に十分な価値があり、博士（工学）の学位にふさわしいものと認める。